

アトモスフィア

少子長寿社会の中で果たす大学の役割

郷 通 子*

18歳人口は昭和41年度の249万人をピークとして、平成20年度には124万人となり、この41年間で半分に減少した。推計によれば、今から15年後の平成36年度にはさらに18万人が減って、106万人になるという(文部科学省「学校基本調査」、総務省「日本の将来推計人口」)。この数値を真正面からとらえ、日本の未来を構築する必要がある。長寿社会の福祉にかかる財政負担や若年層に重くのしかかる年金問題は典型であるが、研究者の養成という視点からも、この問題に目をつぶることは許されない。

少子化による人口減少社会において、大学生の数も大学の数も、相応に減らしていくことを基本とするのが、財務省や経済財政諮問会議、総合科学技術会議による構造改革の考え方である。現に、国立大学が法人化されて5年強が過ぎ、この5年間で、減額された運営費交付金の総額は23の国立大学が消えていった額に相当する(国立大学協会資料)。私は国立大学の学長でありながら、総合科学技術会議の議員としての2年間で、運営費交付金の減少による国立大学法人の窮状に関する意見を言うと、直ちに反論を受ける立場にいた。そこでは「国立大学の数は、今の半分くらいでよい」とする声が大きかったのである。しかし、教育と研究を目的とする国立大学法人は、いろいろな独立行政法人と全く異なっていることは明らかである。大学にしか、体系的な教育と学位を出す仕事はできないからだ。

欧米では、この10数年間において、高等教育に大規模な改革が行われており、教育の高度化とグローバル化が進んでいる。日本の高等教育への公財政支出(対GDP比)はOECD諸国の中で最小であるばかりか、高等教育費の伸び率は日本だけがマイナスである。資源の乏しいわが国は知識基盤社会として世界に存在することを目指すとしているにも拘わらず、全く逆に進んでいる現状がある。

大学は教員、経営担当者、研究者、高度技術者、研究支援者(事務系を含む)、大学院生、学士課程学生などが、多くの職種に誇りをもって働きあるいは学ぶ集団である。わが身を振り返ってみて反省するのだが、大学院生の教育に際して、教員は自分の専門分野での後継者を育てる傾向が強いと思う。しかし、これからの大学は、狭い分野の研究者養成に留まらず、大学院で学んで博士号を得た者が、融合領域や新分野に進む、企業で活躍する、さらに研究以外の職種、例えば初等中等教育の教員、行政、ジャーナリズム、政治家、国際機関の職種などに活かしていけるような教育への転換を求められている。

かなり前の個人的体験であるが、コーネル大学化学教室(Department of Chemistry, 現在のDepartment of Chemistry and Chemical Biology)のハロルド・A・シェラガ教授(蛋白質科学)の下で、3年間のポストドク生活を終えて帰国した。3年間で多くの論文を発表することができた私の帰国に際して、シェラガ教授から次のことばを贈られたときは、その真意をどう理解してよいかとまどった。「通子、これからはコーネル大でやった仕事とは違う分野に進む方がいいと思うよ」。その言葉は私の脳裏に強い響きをもち、シェラガ教授と同じく物理や化学の目で蛋白質を見るのではなく、生物進化の産物として蛋白質を見てみようと考え、新たな方向へと研究を展開できる結果につながった。年齢を重ねた研究者は、若い人には、自分を越えていって欲しいと明言し、勇気をもって新しい研究テーマに挑戦するよう、励ます役割を担うことが大切だと思う。

*大学共同利用機関法人情報・システム研究機構